

聞名仏教

第 190 号 毎月発行
(発行日) 2026 年 7 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号・番号 17810-7-259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

真宗のお念仏 (1)

「南無阿弥陀仏」という言葉
を聞いたことのない人は
少ないと思います。仏教が
六世紀頃に日本に伝わって
以来、仏教が日本人に親し
まれ、そのなかで南無阿弥
陀仏という言葉が日本人の
体にしみこんでいったと思
います。

ただ民衆が南無阿弥陀仏
は何なのか、どういう意味
があるのかを知ることが少
なかったと思います。この
南無阿弥陀仏は仏教語で
が、浄土真宗だけの言葉で
はありませんから、これが
どういう意味かは仏教各宗
の説き方によって違ってき
ます。ですから真宗の南無
阿弥陀仏にはどういう意味
があるのか、その内容を知
らなければなりません。
そこで真宗で説かれてい
るお念仏について、詳しく
お話ししたいと思います。

真宗はお念仏を信じるば
かりで救われる宗教だと云
っても過言ではありません。
『正信偈』は『正信念仏偈』
ともいわれ、「念仏を正しく
信じるうた」という意味で
す。

戒律を護ったり、座禅を
したり、難しい經典を学習
したり、布施(ほどこし)
の行などを行うことによつ
て救われていく道、仏に近
づいていく道もありましよ
うが、真宗は「ただお念仏
を信じる一つ」で、救われ
る、仏になつていく、真理
にであう道なのです。

ですので真宗でお念仏は
非常に大切な行(おこない)
なのです。しかし、この真
宗の念仏はどういう意味の
行いなのかを正確に理解す
るためには、お念仏の「い
われ」をよく聞かねばなり
ません。そこでしばらくお
念仏についてお話を致しま
す。

まず念仏
ということ
ですが、仏
教全体では

念仏行には大きく二つに分
かれます。一つは心で仏を
念じる、憶念する、観念す
るという念仏で、それを「観
念の念仏」といいます。観
念の念仏にも、仏のお心を
観想するとか、仏の真理を
心で念じるとか、仏の像を
経説に随つて思い描いて念
じるなどがあります。仏の
深い真理を心に念じるとい
うのはかなり専門的な修行
となります。

もう一つは仏の名を口で
称える念仏、称名念仏があ
ります。いま真宗の念仏は
称名念仏です。

を念じる」とのとへ口に仏の
名を称える」というのは離
れたものではなかったよう
です。心で仏を念じると自
ずから仏の名を称えるとい
う風になりますから。そう
いう修行がずっとインドか
ら中国へ、さらに日本へ仏
教が伝わっていく中で、心
で仏を観想する念仏と口で
仏の名を称える念仏が分か
れてきたのでしょう。

さて仏たち(釈迦仏・薬
師仏・弥勒仏など)にはみ
なそれぞれに仏の名(名号)
があります。その仏の名を
口で称えるのが称名念仏で
すが、いろいろな仏たちの
名号があるなかで、阿弥陀
仏の名を称える念仏が広ま
つていったのです。その場
合、阿弥陀仏に帰命(南無
― 帰依する)するといふ

《 孟蘭盆会法要 》

八月十日(月) 午後二時始

法話 念佛寺住職

* 法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。

『法味寸言』

佐々木蓮磨師

一、聴聞の秘訣は、一つの法話で満足するまで聞くこと。いろいろ聞こうとすることは迷いの道に入ること。

一、聞いても聞いても聞こえぬというは、聞いているのでなく、自分に納得しようとしているのだ。法を聞くとはい、自分の胸に納得する用事のない謂われを聞くのである。

一、自分が聞き分けるにあらず、自分が聞きつけるにあらず、自己そのものを聞くのである。

一、「お助け」とは、真実の自分に還えること。「助からぬ」とは、自分以外のものを握っていること。

一、厄介なもののある間は踏みぞこないがない。やれやれとなったら危ない。

りに近づいていこうというお念仏でした。

これは中国だけではなく、チベット仏教でも、日本の天台宗や真言宗の一部でも行われている念仏行です。要するに人間の心を浄化する修行としてなされるお念仏です。

これとは違って、『佛説無量寿経』に説かれている阿弥陀仏の四十八願のなかの第十八願のおこころに順つて、南無阿弥陀仏と称える称名念仏があります。これは第十八願の念仏往生の誓いを信じて念仏を称えるところと救いがあるという教えに依っています。このことを日本で初めて説かれたのが法然聖人です。

ただこの念仏往生の誓願に信順して称える念仏に二種あります。一般的に「他力の念仏」・「自力の念仏」といわれている念仏です。真宗は他力の念仏ですがこれについては次回に申します。

(了)

こうした念仏ではなくて、自我だけで生きてしかも不安から離れられない自分を反省し、自我の欲望をかなえる生き方を否定し、自我を超えた真実を覚ろうという仏道として説かれている念仏行があります。これは仏道における人間の修行として称える念仏であります。これについてですが、これも私が台湾の高雄市の郊外にある仏光山という大きな仏教寺院に泊めていただいたことがあり、その日の夕事の勤行に参加しました。およそ三〇〇人ぐらいの人が本堂に集まっていました。出家者が二〇〇人(半数が比丘尼)在家者が五〇人ほどでした。何度も五体投地の礼拝後、『佛説阿弥陀経』が読誦され、その後本堂の前の広い庭に出て、列を組み、南無阿弥陀仏をひたすら称えながら歩くという修行を一時間ほどして終わりました。この時のお念仏は、人間の修行としてのお念仏で、自らの悪しき自我心を浄化して、少しでも仏の悟

あり、また道路の電信柱に「南無阿弥陀仏をつねに称えよ。福を招き災いを除く」という紙が貼ってありました。これは南無阿弥陀仏を称えると「災難を避け福をもたらす」ということで、まさに災難除けのために念仏を称えることが勧められていました。こういうお念仏は台湾だけではなく、やもすると私たちも、仏前で南無阿弥陀仏を称える気持ちの中に「災難が来ませんように、健康でありますように」とお願いをする気持ちで称えることがあると思います。

しかし、これは真宗で説かれているお念仏ではありません。こういうお念仏は人の自我心(都合)からの欲求(願望)を満足させようとするのであって、自我のはからいを否定し自我を超えたはかりない大悲のいのちに帰せしめる仏法とは逆の方向に向かって、さらに迷いを深めかねません。しかし、こういう「災難除けの念仏」「福を求める念仏」が多いのが現実です。

「南無」と「阿弥陀仏」が結びついた「南無阿弥陀仏」が阿弥陀仏の名号として流布しました。こうして現在でも、中国・チベット・ベトナム・台湾・朝鮮半島・日本と、東アジアに南無阿弥陀仏の名号は伝わり、今日でもよく称えられています。

「南無阿弥陀仏」と口で称える行いは民衆の間に広まっています。人がどう受け取って称えているのか、どういう意味で称えているのか、どういう領解で称えているのかは大きな違いがありますので、同じように称えていても受け取り方は違っています。そこでその違いをよく知っておくことが必要です。

お念仏に対してどういう受けとり方があるかと申しますと、私が三十数年ほど前に台湾に旅行しましたときタクシーに乗りました。そうすると運転手の前のフロントガラスの上に「南無阿弥陀仏」と書かれた「お札」のようなものが張って

清沢満之先生に学ぶ

15

以下、清沢満之先生の「我信念」より、先月号の続きです。

*

私が信ずるとは、どんなことか、なぜそんなことをするのであるか、それにはどんな効能があるか、と云う様な色々の点があります。

先づその効能を第一に申せば、この信ずると云うことには、私の煩悶苦悩が払い去らるる効能がある。或いは之を救済的効能と申しましようか。とに角、私が種々の刺戟やら事情やらの為に、煩悶苦悩する場合に、

この信念が心に現われ来る時は、私は忽ち^{たちま}にして安樂と平穩とを得る様になる。その模様はどうかと云えば、私の信念が現われ来る時は、その信念が心一ぱいになりて、他の妄想妄念の立ち場を失わしむることである。如何なる刺戟や事情が^{おか}侵して来ても信念が現在して居

る時には、その刺戟や事情がちつとも煩悶苦悩を惹起^{じやつき}することを得ないのである。

私の如き感じ易きもの、特に病氣にて感情が過敏になりて居るものは、この信念と云うものがなかったならば、非常なる煩悶苦悩を免れぬことと思われる。健康な人にとても苦悩の多き人には、是非この信念が必要であると思う。私が宗教的にありがたいと申すことがあるが、それは信念の為此の如く現実に煩悶苦悩が払い去らるるのよろこびを申すのである。

*

「我信念」は清沢満之先生が亡くなられる前に、自らの信心を告白された文章ですが、今回の文章は先月号に続き、信心が実際の人生生活においてどのような「効能」があるかについて述べられたものです。

効能という点ではまず第

一に「私の煩悶苦悩が払い去らるる効能がある。或いは之を

救済的効能と申しましよう

か。とに角、私が種々の刺戟やら事情やらの為に、煩悶苦悩する場合に、この信念が心に現われ来る時は、私は忽ちにして安樂と平穩とを得る様になる」といわれます。つまり信心によつて「苦悩がなくなる」とい

われるのです。ですがそれは「信心が心に現れた時」にはという言い方をされま

す。信心をいただいたら、それ以後は悩みがなくなるというのではありません。縁によつて煩悶苦悩は何かにつけて起こってくるのす。

種々の刺激や事情で煩悶苦悩が起こるけれども、その苦悩のところ、信心の中身である阿弥陀仏の大慈大悲のお心が現れるときには、苦悩は払い去られてたちまち安樂となり平穩になる、といわれるのであります。

真宗の信心は一過性のもではなく、中国の道綽禪師（五六二〜六四五）が、

信心は「淳心・一心・相續心」といわれますように、信心をいただいた人に信心は相續するのです。消えな

いる。汝を引き受けている。汝をどこどこまでも抱きしめてゐる」との仰せ、大悲のお心を知らせていただくのです。そのときは「ああありがたい」との思いでいっぱいになり、苦悩が一瞬であつても払い去られるのであります。こういうことを清沢先生がここでおっしゃっているのでありましよう。

一旦それに気がつくと、日常生活では阿弥陀仏を忘れてばかりいますが、しかし忘れ去つてしまうことにはならず、フイフイと「ここにゐる」「汝と離れない親がゐる」とのお知らせをお念仏に蒙るのであります。このように反復されてくるのです。なぜ消え去らないのか、それは事実として阿弥陀仏を離れて私自身が存在し得ないからではないでしょうか。

そして縁あつて煩悶苦悩しているときに、そのつど「南無阿弥陀仏！」と称えられ、南無阿弥陀仏と聞かされ、阿弥陀仏が「ここに

私たちは「死ぬのは怖い」「死んだらどこへいくのか」というような不安に陥ることがあります。これも煩悩ですが、こういう煩悩はこの世のいのちが終わるまで、何かにつけて起こってきます。たとえ信心の人であつても同じです。聖人が「凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」と仰せられていますように、臨終の一念のときまで、煩悩はなくなりません。これは信者であらうとなかろうと変わ

らない凡夫の本性です。松並師が「煩惱に目鼻をつけたのが人間だ」といわれましたが、凡夫の心は煩惱妄念が止みません。この煩惱のところ、南無阿弥陀仏とお念仏が現れて、「ここにいる」「お前の親がいる」「浄土につれて行く」と仰せられます。そのお心に触れて、「ああ死んでいくのではない。浄土に生まれさせていただくのだ」「ああありがたい」と知らされます。自我の私にとって、阿弥陀仏は私たちの真実主体でありま

す。 こういう状況を清沢先生は「その模様はどうかと云えば、私の信念が現われ来る時は、その信念が心一ぱいになりて、他の妄想妄念の立ち場を失わしむることである。如何なる刺戟や事情が侵して来ても信念が現在して居る時には、その刺戟や事情がちつとも煩悶苦悩を惹起することを得ないのである。」といわれるのです。

なぜ煩惱妄念に阿弥陀仏

の大悲の心が届くと、煩惱妄念が引き下がるかというのと、もともと煩惱は妄念であつて実体のないものであります。それに比べ阿弥陀様の仰せ、お心、おはたらしは実在が現れたものであります。一つは闇、一つは光。闇がいくら深くてもひとたび光が来ると闇は光に抵抗はできません。光が勝つて明るくなります。真つ暗な部屋でも窓を開ければ光が入つて明るくなります。闇は虚無であり、光は実際にあるはたらきです。

阿弥陀仏が私と離れなくましますという根本の事実は、自分の頭の中に湧く妄念煩惱によつて、揺るぎません、なくなりません、動きません。常に私をつかんでまします。この力によつて私は存在し得るのです。阿弥陀仏のいのちのはたらきは私の全体の基礎となつています。煩惱妄念は、身体の一部である頭脳のはたらきが産み出した〈思い〉です。ただこの〈思い〉がなかなかやつかいなのも事実です。私たちはこの〈思

い〉に振り回されて人生を送ってきたといえるほどですから。

煩悶苦悩が起ることを縁としてお念仏を聞かされる一念に苦悩はなくなりますが、これは一瞬あるいは一時的です。有り難いのですが、いつまでも平穩・安楽というわけにはいきません。また縁があつて大なり小なり苦悩を繰り返すのです。そうするとそれがまたお念仏の縁となつて阿弥陀仏の大悲にあわせていただく。そういう反復の生活がお念仏の生活でありましよう。

そういうように煩惱はお念仏の助縁となるものであり、仏法にそのつどあわせていただく大事な縁になります。そのようにして阿弥陀仏と私の〈親子の情〉がぼつぼつですが深まつてまいります。これは聞法生活の大きな楽しみです。

苦悩の多い人生ですが、苦悩の生活がお念仏のはたらいてくださる、阿弥陀仏の大悲のはたらきがはたらいてくださる〈場所〉なの

です。そこで清沢先生は「この信念と云うものがなかったならば、非常なる煩悶苦悩を免れぬことと思われる。健康な人にとっても苦悩の多き人には、是非この信念が必要であると思う。」と仰せられるのです。(了)

住職雑感

五月の末から六月の初めにかけて、六日間、台湾の真宗信者三名が、話を聞きたいということで、来寺された。午前二時間、午後二時間の談合であつた。通訳を神戸市在住のSさん(台湾・慈済会の熱心な会員)が献身的にして通訳してくれたお陰で充実した話し合いになった。なぜ台湾から尋ねてこられたかという点、台湾で現在、真宗信者が二〇〇人ほどおられると云うことである。なぜ台湾に真宗が少しづつでも伝わってきたかというと、親鸞会の影響もあるが、主に本願寺派の法雷学派の流れをくむ野瀬瑞黙師の布教の結果だといつてよい。野瀬師は法雷会で著名な稲垣瑞劔師のお弟子で、晩年に台湾の高雄市に移住し盛んに真宗を説いたお方である。現在、youtubeで師の法話を拝聴することができ

る。師は香港でも法話会をもつていて、中国人への真宗布教の功労者であり、二〇一一年に逝去された。来られた三名の方も法雷会で真宗を聞いてきた人たちである。なぜ念佛寺にこられたのかというと、念佛寺のHPを見て、その中の香樹院徳龍師や一蓮院秀存師などの「信心語録」を読んだのが縁であるらしい。幾つかの「信心語録」を広東語にAIで翻訳したそうである。法雷会で学んだのに、どうして念佛寺に縁をもたれたのかというと、法雷会では称名念仏をさほど称えないそうである。なるほど法雷学派の真宗は信心正因・称名報恩説であるから、称名念仏は仏恩報謝の念仏と限定している。それゆえ、それが物足りなくて、称名念仏を重要なものと説いている念佛寺に尋ねてこられたということである。Sさんと台湾の信者さんは菜食主義者で昼食をどうするかが問題であつた。日本で菜食するのは難しい。神戸の住吉に菜食レストランがありそこに行くとか、喫茶店で肉なしのサンドイッチを作ってもらつて済ませたとのことである。HPによつて外国の方にも縁ができるなど思ひもしなかったのと、AIでかなり正確に翻訳できるのには驚いたことである。